

パーソナリティ特性が反応時間を指標とした 隠匿情報検査に与える影響

○田上智子・古満伊里
(広島修道大学健康科学部心理学科)

【目的】

隠匿情報検査 (Concealed Information Test: CIT) では、犯人・被害者・捜査機関しか知り得ない事件内容の細目を被検者が知っているか否かを検査する。近年、反応時間を指標とした隠匿情報検査 (Reaction Time-based CIT: RT-CIT) が、簡便性の観点から注目されている。生理反応を指標とした隠匿情報検査において、パーソナリティとの関連が検討されてきた。その中で、サイコパスの人は検出率を低下させることが報告されている (兒玉・平, 2018)。しかしながら、パーソナリティと反応時間を指標とした隠匿情報検査との関連はまだ検討されていない。そこで本研究では、被検者の持つパーソナリティ特性 (外向性・神経症傾向・サイコパシー特性) が、RT-CIT に与える影響を検討した。

【方法】

被検者 広島修道大学の学生 68 名であった。
窃盗シナリオ課題 被検者に対して窃盗シナリオ課題を実施した。内容は、ある資産家宅に侵入し金目の物を盗み出すというものであった。窃盗シナリオ内には、行動の一部を被検者自身が選択するための質問カテゴリが 5 問あった。各質問カテゴリのキーワードは、『コードネーム』『侵入口』『宝飾品』『180 万円の場所』『縛ったもの』であった。窃盗シナリオ課題で被検者自らが選択した項目を裁決項目とし、それ以外の 4 項目が非裁決項目となった。
手続き 被検者には「この検査で窃盗を行ったと判定されなければ報酬を贈呈します」と教示した。RT-CIT は、パソコンの画面上部に呈示するキーワードに対して、画面中央に呈示する刺激を画面左右に呈示する「はい(A キー)」、「いいえ(L キー)」に対応したキーを押すことで分類する課題であった。裁決項目と非裁決項目に対しては「いいえ」、標的項目には「はい」で回答させた。各項目からなる質問系列を練習試行で 2 回、本試行で 6 回繰り返した。項目は質問カテゴリにかかわらずランダムに呈示した。試行間間隔は 500~1000ms であった。

質問紙 ①モーズレイ性格検査 (MPI) : 外向性・内向性、神経症傾向を測定した。「はい」「いいえ」「どちらでもない」の 3 件法で回答を求めた。②日本語翻訳版 PSPS (大隅ら, 2007) : 大学生などの一般人口におけるサイコパシー特性を測定した。PP (一次性サイコパシー), SP (二次性サイコパシー) から構成された。「全く当てはまらない」から「非常に当てはまる」の 4 件法で回答を求めた。

【結果および考察】

プログラムの不具合により正常に実験が実施できなかった被検者 2 名を分析から除外し、66 名のデータを分析に使用した。パーソナリティ特性が RT-CIT に与える影響を検討するために、説明変数をパーソナリティ特性の各項目の得点、目的変数を裁決項目と非裁決項目の反応時間の差として重回帰分析を行った。説明変数が『神経症傾向』の場合、有意な正の関連があった ($\beta = .33, p < .05$)。なお、外向性 ($\beta = .06, ns.$), PP ($\beta = .02, ns.$), SP ($\beta = -.06, ns.$) の場合は有意な関連は見られなかった。重回帰分析の結果を Table 1 に示す。

Table 1
独立変数をパーソナリティ特性、従属変数を反応時間の差とした重回帰分析

	β	VIF
外向性	.06	1.10
神経症傾向	.33 *	1.07
PP	.02	1.05
SP	-.06	1.17
R^2	.10	

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

神経症傾向のある被検者の反応時間は、被検者全体の反応時間よりも長いことが報告されている (朝長, 1995)。また、神経症的傾向の強い人は、さまざまな刺激に対して非常に強い情緒的反応を示し、自律神経系が不安定で興奮しやすいという特徴がある。このことから、呈示された刺激に対して正しい反応をしようと興奮し、情報処理に時間がかかることで反応時間が長くなったと考える。検査時に被検者の神経症傾向を刺激するような環境を作ることによって、裁決項目と非裁決項目の反応時間に差が出やすくなり、正確な判定結果を得られやすくなるのではないだろうか。